

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

第三章 離島の暮らし

「いつも温かい南の島だから、自給自足でやっていけそう。なんと言っても屋久島は水が豊富だから、畑でお野菜とか作って、海で魚釣ったりしてのんびり暮らしていけそう。」というイメージを持たれることが多い。また、そう期待して移住して来る人もいる。果たしてどうなのか？

■四季

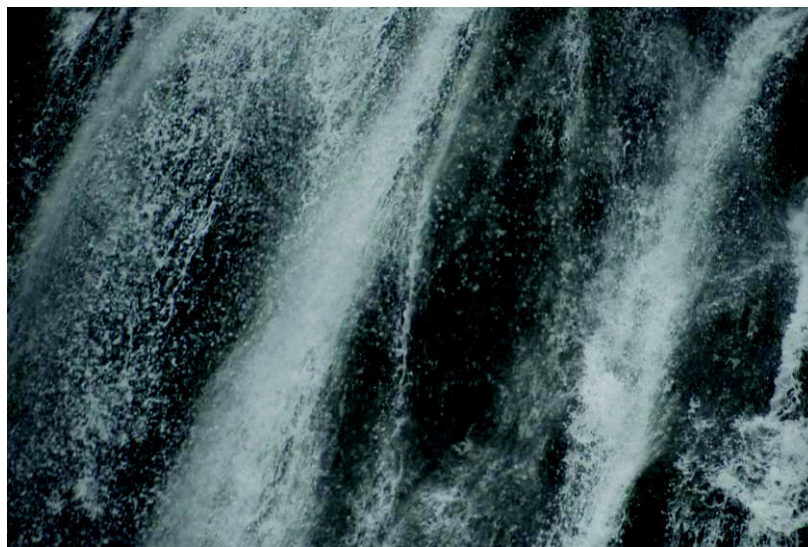


春、屋久島は雨に包まれる。

ここでまた「え、だって屋久島っていつも雨でしょ？」と思われることでしょう。林芙美子が小説「浮雲」の中で屋久島は月に35日雨が降ると表現した島である。確かに年間雨量は大阪や東京に比べて4～5倍。桁外れの雨が降る屋久島ではあるが、春の雨は日本の光景。天気予報士がニュースで伝えることがスギ花粉の話から桜前線の話に変わる。そしてどこかの公園の桜の木の下で、「この桜は今週末が満開で見頃となりそうですが、気になるお天気は…」などと話していることが多い。桜の時期は三寒四温、ひと雨ごとに温かくなる季節なのである。そして屋久島の桜は、ソメイヨシノは学校や役場などに植えられており、卒業式の頃に満開を迎える。山を彩る桜はヤマザクラ。

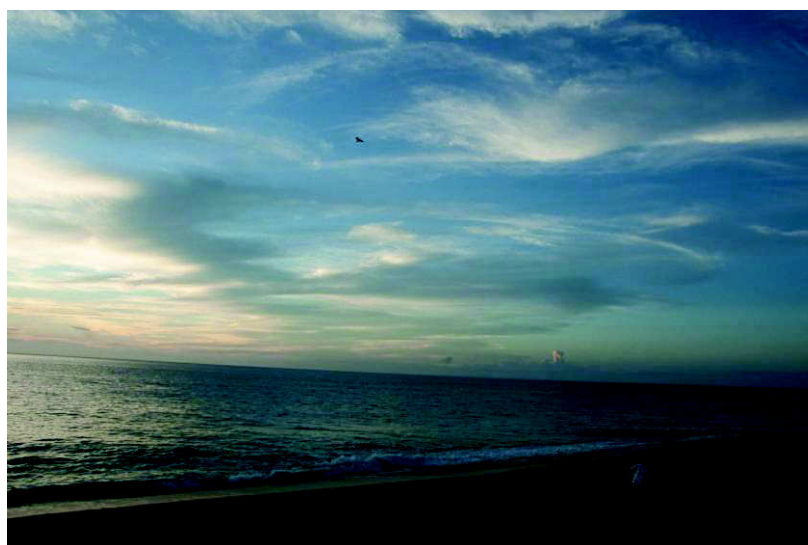


新緑とともに広がるヤマザクラの開花。ゴザとビールではなく、カメラとおにぎり持ってトレッキングとともに楽しめます。



梅雨、もちろん雨が降り続く。山も森も海も浜も、その恵みを存分にうけて育まれる。

屋久島がとても美しい季節ではあるが、あまりに降り続く雨はさすがに憂鬱になる。



夏、期待通りの南の島を楽しめる。海も川も泳ぐ魚が透き通る。だからと言って朝から一日中海や川で泳いでい

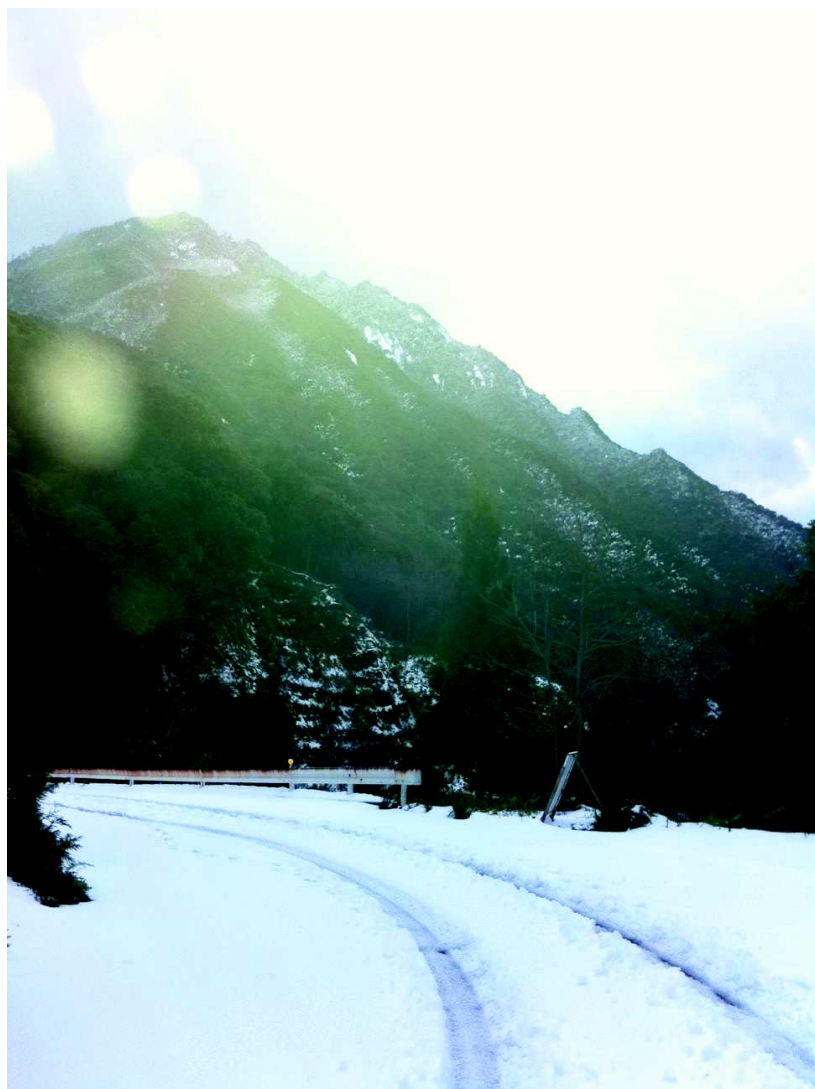
たら焦げる。島の人々は夕方頃から泳ぐ。灼熱の太陽を遮るものもなく浴び続ければ体力は相当消耗するし、過度な日焼けは危険なので要注意。しかし、こちらでも毎日ニュースでお届けされるような猛暑や熱帯夜にはならない。日中の最高気温も32℃くらいのもので、岳降ろしと呼ばれる山からの風が心地よく、コンクリートやビルではなく本当の森に囲まれている。そして夜は満天の星空と天の川を楽しめる。

秋、あっという間に通り過ぎる。モミジがなく紅葉する樹木が少ない。秋だなあ、と感じる光景が少ないのである。

そして季節は冬へ。人々が暮らす麓は亜熱帯気候であり、滅多に雪は降らない。しかし、標高1000mを超えれば、冬は雪に包まれる。



人々をさらに拒む厳しい冬がやってくる。海は荒れ、空はどんより暗い。亜熱帯気候とは言え山がすぐそばに聳えるため吹く風は冷たく、ストーブや炬燵も必要である。



かつては日本最南端での雪まつりも開催されていた。近年は暖冬傾向とのことではあるが屋久島は近年更に豪雪の冬を過ごしている。2月中旬には少しずつ春の兆しが見えはじめ、菜の花が咲き誇る。



そして桜を待ち焦がれる日々となり、季節は巡る。

■日常生活

鹿児島県の最低賃金は642円（平成22年10月28日発効）全国平均は730円。

ランキングで最下位から5県までを沖縄と九州で占めており、屋久島も鹿児島県に準じている。では、日常生活にかかる費用は全国と比べてどうなのか？

全国より安いもの：土地、家賃。

島の中でも街の中心と思われる辺りでも坪2万円くらいが相場。商業スペースの一等地でも10万円くらいとか。私が移住して最初に住んだアパートは2DKで家賃は4万円。それでも当時は高い物件として大家は島の人々から非難を受けていた記憶がある。しかし、そもそもアパートなるものが殆どなかった時代でもあり、家賃の相場もあってないようなものだった。

ちなみに現在でもアパートは少なく、一人暮らし用アパ

一トで4～5万円くらいが相場。住みたいと言われても住む家は少なく、常に周りで家を探している人が多い。

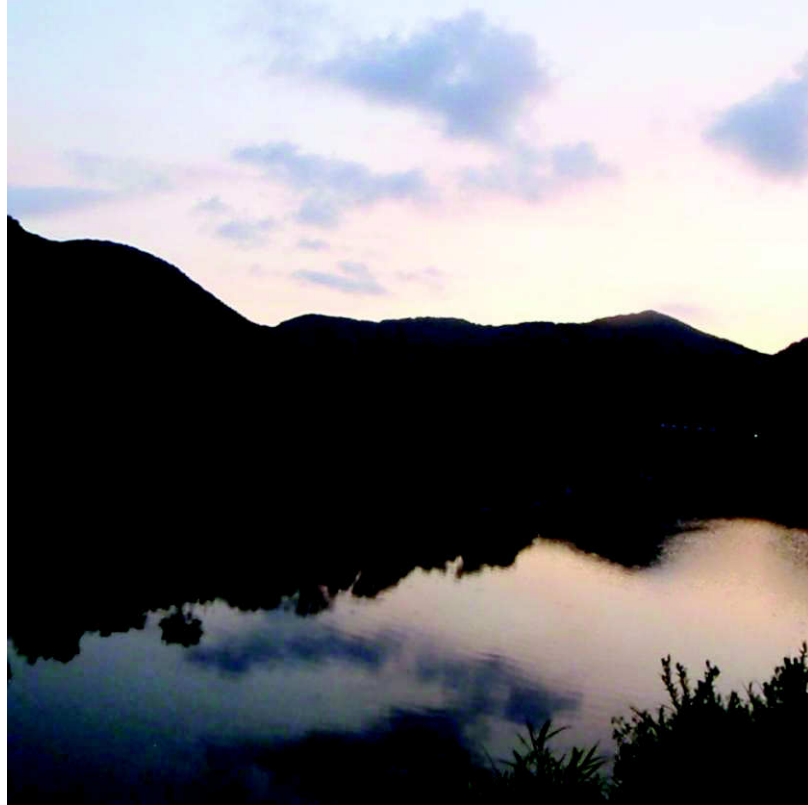


では、全国より高いもの。

残りのほぼ全てと言っても良いであろう。

生活に関わる物資、食料の殆どが船に乗って運ばれてくるため、当然送料が加算されている。記憶に新しいのは数年前のガソリン代の急騰の際、屋久島では200円を超えている。また、台風などの天候不良で船が欠航すればたちまちスーパーには何もなくなってしまう。食糧がなんでも賄えていると思われがちではあるが、現実はそのようではない。それは屋久島の人だけではなく何処でも同じことなのだが、国産のものや地元産のものはかえって価格が高くなってしまったりして輸入の安いものに手を出してしまう。本当は自分の目で舌で確認できる安全で美味しい食材も近くにあるはずなのだが...

需要と供給のバランスが崩れると農業や漁業といった第一次産業の従事者は減り、ますます美味しいものが食べられなくなってしまい、アイデンティティの築かれない社会に向かっていくのかもしれない。



ニッポンの誇りである四季の移ろい、自然の恵みが存分に味わえる屋久島。常に自然と背中合わせの暮らしには、人間の無力さを見せつけられることが多い。それでも当たり前と思っていることの大切さや、本当に必要なものに気付くことが出来る、素晴らしく豊かな暮らしがここにはある。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして
<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>